

「李將軍列傳」(司馬遷)

漢の第三代皇帝文帝の十四年(紀元前一六六年)、漢民族の重大な脅威たる遊牧民族匈奴が大舉して侵攻して來た。代々弓術を習ひ傳へる將軍家の子弟であつた李廣は討伐軍に従軍して目覺しい働きを示したのみならず、文帝に従つて狩獵しゅれふに参加した折には猛獸と格闘して見事にこれを仕留めたりした。その有様を見て文帝が云つた、「惜しいかな」、汝、「時に遇はず」、高祖の御代に生れてゐたら難なく諸侯になれたらうに。

高祖とは云ふ迄もなく漢帝國の創始者たる英雄劉邦の事であり、漢初の英雄時代に生れ合はせなかつた李廣の不運を文帝は嘆じた譯だが、それはともかく、その後も李廣は匈奴と勇敢に戦ひ、廉潔れんけつにして朴訥ぼくとつかつ剛毅な武人として名聲を高めて行く。司馬遷が書いてゐる、「李廣は清廉な人で、恩賞や下賜品を受けるといつも部下に分け與へた。飲食は士卒と同じ物をとつた。(中略) 家には財産は残らなかつたし、死ぬまで家の經濟について觸れなかつた。(中略)

李廣は訥辯とらべんで口數少なかつた。(中略) 李廣が兵をひきいる場合、水や食料が缺乏してゐる地域では、水を發見すると、兵卒たちが飲み終るまで、李廣は水に近づかなかつた。兵卒たちが食べ終るまで、李廣は食事をとらなかつた。寛大で些細なことをやかましくいはなかつた。部下たちはこれらのことから、かれを愛し、喜んで命令をきいた」。

然るに、文帝景帝武帝の三代に互つて何度も匈奴と戦つた李廣であつたが、不運も重なり、戦功が認められる事が少く、才能の遙かに劣る同輩が出世するのに自らは不遇をかこつ時期が長く續いた。そして、武帝の二十二年(紀元前一一九年)、高名な大將軍衛青ゑいせいの指揮下、大規模な匈奴討伐戦が敢行される。李廣は今度こそ「單于ぜんうと戦つて死にたい」として従軍を強く希望する。「單于」とは匈奴の首領を謂ふ。處が、武帝は衛青に對して、「李廣は年老いてをり運の悪い男だから」單于の主力正面とは戦はせるなど命じる。その結果、李廣軍は迂回して進む事を餘儀なくされるが、道案内がをらず道に迷つて合戦に遅れ、合戦後、李廣の部下は衛青から不始末の報告書の提出を強要される。李廣は、部下に罪は無い、道に迷つたのは自分だと云つて、側近の部下にかう語る、自分は六十餘歳の今迄に大小七十餘り匈奴と戦ひ、今回幸ひにも大將軍に従つて出陣したが、廻り道を餘儀なくされ、道に迷つた、もはやこれは天命ではある

まいか、今更「刀筆たうひつの吏りに對する能はず」。さう云ふや李廣は刀を抜いて自ら己が頸くびを刎はねた。部下達は皆泣き、これを聞いた民衆も、李廣を知る知らぬの別無く泣いた。「刀筆の吏」とは、文書の作成を専らとして細事に拘る小役人を蔑きげすんで謂ふ。

武田泰淳が「司馬遷―史記の世界」に書いた様に、司馬遷は「あまり、人間をほめ」ず、「むしろ冷酷なほど、批判」してをり、匈奴討伐に赫々たる戦果を挙げた衛青と霍去病かくきよへいといふ二人の大將軍についても、「史記」の「衛將軍・驃騎列傳」に於ける記述はかなり「冷酷」かつ「批判」的なのだ、李廣については明かに「愛情を以て記録してゐる」。それは詰り、李廣の如き理想的武人が悲運を嘗なめる時勢や國家への司馬遷の義憤の然らしむる處であつたのかもしれない。「歴史は、その時代の優れた人間を忘却から救ひ、ながい時代を通じて名聲を保つための高貴な仕事である。なぜならば、歴史とはこの世界に於ける辯護人であるから」だと、フランズ支那學の碩學せきがくシャヴァンヌは「司馬遷と史記」(岩村忍譯)に書いてゐる。因みに、中島敦が描いた悲運の武將李陵は李廣の孫であつた。(小川環樹他譯、「史記列傳(四)」、岩波文庫)